

派遣留学経験とグローバル人材育成 －JAOS 留学アセスメントテストを用いた考察－

Study Abroad Experiences and the Development of “Global Human Resources: Analysis Using the JAOS Study Abroad Assessment Test

新見 有紀子、阿部 仁、星 洋

要旨

本稿では、一橋大学から 1～2 学期間、海外の協定校に留学した学生の留学前後の能力の変化について、学生が留学前後に受検した JAOS 留学アセスメントテスト（行動特性診断）の測定結果を用いて、グローバルな環境で必要とされるコミュニケーション力、問題解決力、グローバルで活躍する姿勢、留学で求められる行動という 4 つの「グローバル力」という観点で分析を行った。2016 年度（2016 年夏～2017 年春）と 2017 年度（2017 年夏～2018 年春）に留学を開始した学生の 2 年分のデータによる分析に加え、過去の海外経験別で分析を行った。その結果、全体データでは、特にコミュニケーション力の平均値について、統計的に有意な差異が認められた。また、過去の海外経験別での比較では、過去に 1 ヶ月以上の海外経験のない学生の値が、留学前後ともに全般的に高かったことも明らかになった。

キーワード: グローバル人材、社会人基礎力、留学効果、派遣留学、海外経験

1 はじめに

社会のグローバル化が進む中、近年、多くの大学が国際化に力を入れている。とりわけ、世界を舞台に活躍できる「グローバル人材」を育成し、社会に排出することが、日本の諸大学における喫緊の課題となっている。グローバル人材育成推進会議（2012）によると、グローバル人材に求められる資質には（1）語学力・コミュニケーション能力、（2）主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、（3）異文化の理解と日本人としてのアイデンティティという 3 要素が含まれるとされる。同会議は、これらの要素に加え、社会人として一般的に求められる汎用的な資質である、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワーク、リーダーシップの重要性を指摘している（グローバル人材育成推進会議, 2012）。さらに、グローバル人材育成推進会議（2010）では、グローバル人材の資質として、社会人基礎力に言及している。社会人基礎力とは、前に踏み出す力（主体性、働きかけ力、実行力）、考え抜く力（課題発見力、計画力、創造力）、チームで働く力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）などの汎用能力が含まれているとされる（経済産業省・中小企業庁, 2018）。以上のグローバル人材像の概念に関する

議論を概観すると、グローバル人材には、国際的な環境で特に重要となる語学力や異文化対応力に加え、すべての大学生が卒業までに身につけておくべき、社会人として求められる汎用力を備えていることも期待されていることがわかる。

以上のような資質を備え、変化の激しいグローバル社会に対応できる人材を育成するため、日本の大学では、在籍学生の海外留学促進が進められている。そして、近年、日本国内の大学在籍中に、数週間から1年程度の海外留学を行う学生数が増加傾向にある。日本学生支援機構（2019）の調査によると、日本の大学在籍中に海外留学をした学生は、2017年度に105,301名となった。このうち、1ヶ月未満の留学参加者が6割以上を占めた一方、3ヶ月以上1年未満という、日本の大学における1～2学期間に相当する留学をする学生の数も25,393名に上り、全体の24%程度を占めた。日本の大学在籍中の様々な留学の形態のうち、1～2学期間にわたる派遣留学は、語学要件の高さや留学期間の長さなどから、1ヶ月未満の短期留学等に比べると、参加するための障壁は高いと言える。その一方で、比較的長期にわたる期間を海外で過ごすこととなるため、語学力や異文化への対応力を含む、より大きなアウトカムが期待される。

他方、大学からの海外留学者の増加に当たって、留学による学びの成果を分析し、より効果的な留学プログラムや支援を提供することの重要性が高まっている（総務省、2017）。海外留学の前後の学生の能力の変化を検証し、留学を通じた学生の学びの成果を最大化する方策を検討する上では、当該学生の個人的な属性を考慮して分析を行うことが欠かせない。留学前後の変化に影響を与えうる属性の一つに、過去の海外経験の違いが挙げられる。例えば、McKeown（2009）が米国で実施した調査によると、過去にまとまった海外経験を持っていない者の方が、過去に海外経験のある者と比較して、留学を通じて得られる学びの効果が大きい傾向にあることが示されている。日本国内の先行文献では、留学志向性という観点から、過去に留学経験のある者の方が、留学を志向する傾向があることが複数の研究で言及されている（野口、2009；船津・堀田、2004；山本、2017）。その一方で、過去の海外経験の種類と、留学前後の能力変化との関係性を検証した研究は国内外ともに不足している。

2 調査方法

2.1 調査の目的

日本の大学からの1～2学期間の派遣留学は、社会人基礎力を含むグローバル人材としての素養を身につける上でどのような役割を果たしうるのだろうか。また、個人の過去の海外経験別で留学前後の変化はどう異なるのか。本稿の目的は、一橋大学から1～2学期間、海外の協定校に留学した学生の留学前後の能力の変化について、学生が留学前後に受検したJAOS留学アセスメントテストの測定値に着目して分析を行うことである。本稿では、2018年度の一橋大学国際教育センター紀要第9号における論文

(阿部・新見・星, 2018) で分析対象とした 2016 年度のデータに、2017 年度のデータを加えて分析した結果を報告する。具体的には、2 年分のデータ全体を用いた分析に加え、過去の海外経験別での結果を示す。この際、2018 年度の一橋大学国際教育センター紀要第 9 号で報告した 2016 年度のデータの分析値の一部に誤りが見つかった¹ため、修正後の値を示す。

2.2 調査対象者

本稿で分析対象とするのは、2016 年度（2016 年夏～2017 年春）に留学を開始した学生 119 名中、JAOS 留学アセスメントテスト未受検の 3 名を除いた 116 名と、2017 年度（2017 年夏～2018 年春）に留学を開始した学生 107 名中、同アセスメントテスト未受検の 31 名を除いた 76 名の計 192 名のデータである。全体における回答率は 86% である。

2.3 JAOS 留学アセスメントテスト（行動特性診断）

JAOS 留学アセスメントテストは、海外留学協議会（JAOS）が、行動特性研究所と提携して開発した行動心理学的アプローチを用いた心理テストである（海外留学協議会・行動特性研究所, n.d.）。このアセスメントテストは、グローバルな環境で必要とされるコミュニケーション力、問題解決力、グローバルで活躍する姿勢（グローバルマインド）、留学で求められる行動（留学先での学習行動・グローバルビヘイビア）という 4 つの「グローバル力」のコンピテンシーを測定することが可能である。4 つのグローバル力には、それぞれ 5～6 の下位項目であるコンピテンシーが含まれている（表 1）。JAOS 留学アセスメントを用いることによって、グローバル人材や社会人基礎力と関連のある 4 つのグローバル力という観点に関して、留学前後の行動特性や能力・姿勢の変化を分析することが可能である。

表 1. 行動特性の 4 つのグローバル力とコンピテンシー

| 4 つのグローバル力 | コンピテンシー | |
|------------|------------|--------------------------------|
| コミュニケーション力 | 主張力 | 自分の考えや意見を、明確に発言し、伝える力 |
| | 自己開示力 | 自分の考えていることや感じていることを、積極的に伝える力 |
| | プレゼンテーション力 | 資料やデータを使い、相手にわかりやすく説明する力 |
| | 傾聴力 | 相手の言葉を遮らず、最後まで聞き取る力 |
| | 共感力 | 相手の感情や気持ちに寄り沿い、素直に共感する力 |
| | 受容力 | 相手の意見や考え方を、批判しないで、ありのままに受け入れる力 |

¹ 2018 年度の一橋大学国際教育センター紀要第 9 号で報告した、2016 年度のデータにおける留学で求められる行動（留学先での学習行動・グローバルビヘイビア）の留学後の平均値が誤っていた。本稿において、正しい値を報告する。

| | | |
|----------------------------------|----------|---------------------------------------|
| 問題解決力 | 計画立案力 | 目的の達成に向けて、短期的・長期的な計画を立てる力 |
| | 情報収集力 | 情報のネットワークを築き、多方面から情報を収集する力 |
| | 企画提案力 | アイデアを企画化し、用法やデータを統合し、提案する力 |
| | 迅速実行力 | 課題達成のために、素早く意志決定し、迅速に行動する力 |
| | 変化応用力 | 環境の変化や関係者に合わせて、柔軟に対応する力 |
| | 完結達成力 | 目標や課題を中途半端で終わることなく、完結する力 |
| グローバルで活躍する姿勢 (グローバルマインド) | チャレンジ力 | 現状に満足せず、高い目標を設定し挑戦を続ける |
| | 成功への熱意 | 困難な状況においても、情熱を持ち続け、最後までやり遂げる |
| | 主体的行動 | 自ら目標を設定し、当事者意識を持って行う |
| | 多様性受容 | 多様な文化や価値観を、幅広く受け入れる |
| | 探究心 | さまざまな情報を取入れて、多様な考え方に興味を持ち、追求する |
| 留学で求められる行動（留学先での学習行動・グローバルビヘイビア） | 積極的な質問 | わからないことを明確にしたり、話題を深めるために、積極的に質問する |
| | パーティシパイト | 多様な人に異文化との出会いを求めて、イベントやパーティ等に積極的に参加する |
| | 持続力 | 新たな能力を身につけるために、やろうと決めたことや取り組んだことを持続する |
| | 評価の受容 | 自分自身の成長や能力のために、相手からの評価を素直に受け入れる |
| | ホスピタリティ | 相手と信頼関係を築き、受け入れてもらうために、気配りをしながら貢献する |

出典：（海外留学協議会・行動特性研究所，n.d.）より筆者作成

一橋大学では 2016 年度以降、1～2 学期間の派遣留学に参加する学生に対し、留学前後に JAOS 留学アセスメントテストを実施している。また、同アセスメントテストの結果を用いて、本人に対するフィードバックの機会を提供している。特に、留学前のオリエンテーションにおいては、コミュニケーション力のコンピテンシーのうち、留学中に伸ばしたい能力を学生自身に選択してもらい、その力を伸ばすための留学中の行動目標を立ててもらっている。さらに、学生のアセスメントテストの結果を用いて、海外留学の支援に活かすことを目的とした分析も実施している。一橋大学国際教育センター紀要の第 8 号（渡部・阿部・星・二子石，2017）と第 9 号（阿部・新見・星，2018）における報告においても、このツールを採用した経緯、及び、その測定数値に基づく分析結果を報告している。本報告においても、JAOS 留学アセスメントを用いて留学前後の行動特性や能力・姿勢の変化の分析を行った。

3. 分析結果

3.1 全体データによる分析結果

2016 年度と 2017 年度の 2 年分のデータを用いて、4 つのグローバル力について、留学前後それぞれの平均値を算出した。4 つのグローバル力それぞれについて、年度

別での平均値を示したものが図 1 である²。2017 年度の留学で求められる行動の平均値のみ留学後に減少していたが、2016 年度と 2017 年度の合計のデータに関しては、4 つのグローバル力全てにおいて、留学後の値の方が高かった。

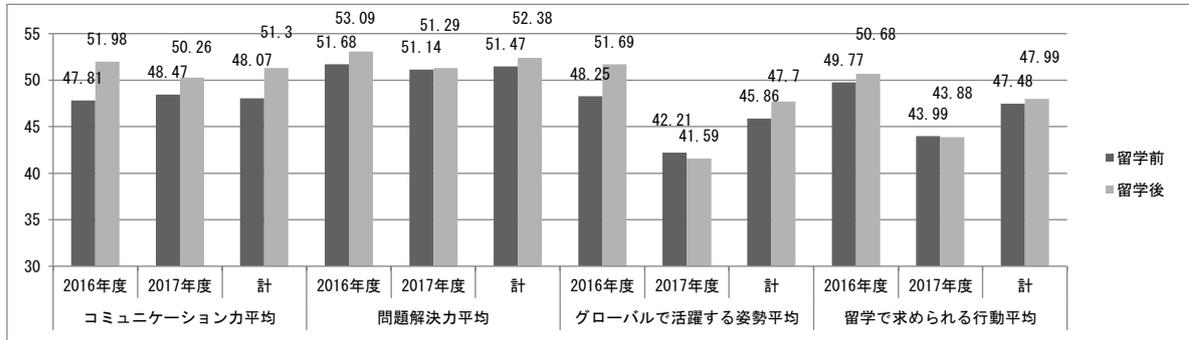


図 1. 4 つのグローバル力の変化 (年度別)

また、4 つのグローバル力について、留学前後それぞれの平均値を用いて対応のある t 検定を行った (表 2)。その結果、4 つのグローバル力のうち、コミュニケーション力とグローバルで活躍する姿勢の 2 つの観点に関して、留学前後のスコアに統計的な有意差が認められた³。ただし、このうち意味ある差異とされる中以上の効果量 (0.5 以上) (Koizumi & Katagiri, 2007) が認められたのは、コミュニケーション力のみであった。

表 2. 4 つのグローバル力に関する対応のある t 検定の結果

| | 平均値の差 | 標準偏差 | 平均値の標準誤差 | 差の 95% 信頼区間 | | t 値 | 自由度 | 有意確率 (両側) | 効果量 (Δ) |
|--------------|-------|------|----------|-------------|------|-------|-----|-----------|------------------|
| | | | | 下限 | 上限 | | | | |
| コミュニケーション力 | 3.23 | 6.98 | 0.50 | 2.23 | 4.22 | 6.40 | 191 | 0.000** | .51 (中) |
| 問題解決力 | 0.91 | 7.20 | 0.52 | -0.12 | 1.94 | 1.75 | 191 | 0.082 | .12 (ほとんどなし) |
| グローバルで活躍する姿勢 | 1.84 | 8.45 | 0.61 | 0.63 | 3.04 | 3.01 | 191 | 0.003* | .20 (小) |
| 留学で求められる行動 | 0.51 | 4.99 | 0.36 | -0.20 | 1.22 | 1.41 | 191 | 0.161 | .10 (ほとんどなし) |

注) * $p < .01$, ** $p < .001$

² 2018 年度の一橋大学国際教育センター紀要第 9 号で報告した、2016 年度の留学で求められる行動の留学後の平均値が誤っていた。本稿で報告する 50.68 が正しい値となる。また、学部別の正しい値は、商学部 51.26、経済学部 51.95、法学部 50.82、社会学部 49.38 であり、留学前後の差分は、商学部 1.33、経済学部 2.48、法学部 -0.16、社会学部 0.05 となり、法学部は留学前と比較して、留学後の値の方が低かった。

³ 2018 年度の一橋大学国際教育センター紀要第 9 号では、2016 年度の派遣留学参加者の留学で求められる行動の留学前後の平均値に有意差が認められたと報告したが、正しくは、留学前後の平均値に有意差は認められなかった。本稿においては、2016 年度と 2017 年度の派遣留学参加者の合計による分析結果を示したが、2 年分のデータにおいても、留学で求められる行動の留学前後の平均値に有意差は認められなかった。

3.2 過去の海外経験別による分析結果

さらに、留学前後での4つのグローバル力について、192名分のデータから、16名の留学生と、過去の留学経験のデータが欠損していた3名を除いた173名分のデータを用いて、過去の海外経験別での比較を行った。まず、過去の1ヶ月以上の海外経験の有無により分類すると、海外経験あり88名と、海外経験なし85名となった。すなわち、2016年度と2017年度の派遣留学参加者の半数以上が、留学前に少なくとも1ヶ月以上の海外経験があったことがわかる。

次に、過去の海外経験についての詳細を見ていく。2016年度と2017年度の派遣留学参加者の留学前の1ヶ月以上の海外経験について最大3件まで回答を求めところ、人数が一番多かった海外経験の形態は、語学や文化研修を含む1ヶ月（うち1名のみ2ヶ月）の短期留学だった（表3）。本分析の対象者173名のうち3割以上の学生が、少なくともこのような短期留学経験を持っていた。次に多かった過去の海外経験の形態は、親の仕事による海外在住経験だった。親の仕事による海外経験の期間は、短いもので1年、長いもので17年6ヶ月であり、上述の1ヶ月程度の短期留学の形態と比べると長期に渡っていたことが特徴である。これら2つの海外経験以外には、その他の留学として、9ヶ月から11ヶ月程度の中期の留学経験者、1ヶ月のボランティア、1ヶ月のインターンシップの参加者、1ヶ月の海外旅行経験者がいた。

表3. 過去の1ヶ月以上の海外経験（3回まで）

| 過去の海外経験 1 | | 過去の海外経験 2 | | 過去の海外経験 3 | |
|-----------|----|-----------|----|-----------|---|
| 短期留学 | 56 | 短期留学 | 11 | 短期留学 | 4 |
| 親の仕事 | 26 | 親の仕事 | 7 | 親の仕事 | 1 |
| その他の留学 | 3 | その他の留学 | 2 | | |
| ボランティア | 1 | ボランティア | 2 | | |
| インターンシップ | 1 | インターンシップ | 1 | | |
| 旅行 | 1 | 旅行 | 1 | | |
| 計 | 88 | 計 | 24 | 計 | 5 |

次に、これらの過去の海外経験の形態のうち、人数が多かった短期留学経験者、親の仕事に伴う海外在住経験者のグループに加え、過去に1ヶ月以上の海外経験の無い学生の3つのグループで、派遣留学前後の4つのグローバル力の値について比較した（図2）。この際、上述の173名分のデータから、過去に異なる2種類以上の形態の海外経験のある者8名（上述の海外旅行経験者2名を含む）と、過去の海外経験の形態のうち人数が比較的少なかったその他の留学、インターンシップ、ボランティア経験者の計5名を除外した160名分のデータでの分析を行った。分析に用いたグループ

の内訳は、過去に1ヶ月以上の海外経験の無い学生85名、短期留学経験者51名、親の仕事による海外在住経験者24名だった。

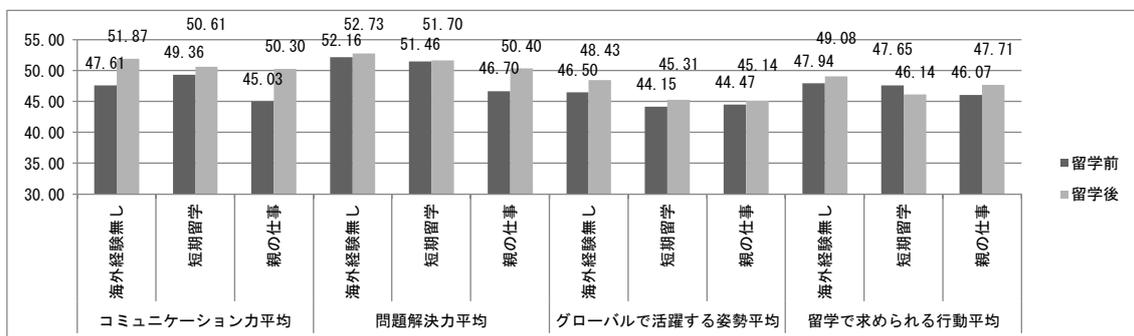


図2. 4つのグローバル力の変化（主な過去の海外経験別）

留学前の値については、過去に1ヶ月以上の海外経験の無い学生のグループの問題解決力、グローバルで活躍する姿勢、留学で求められる行動という3つのグローバル力の平均値が、短期留学経験者と親の仕事による海外在住経験者よりも高かった。さらに、同グループの留学後の値は、4つのグローバル力全ての値について、過去に1ヶ月以上の海外経験のある2つのグループよりも高かった。中でも、コミュニケーション力は4.26ポイント増加していた。親の仕事による海外在住経験者のグループは、留学前のコミュニケーション力、問題解決力、グローバルで活躍する姿勢の値が3グループの中で最も低かったが、留学前後でコミュニケーション力は5.27ポイント、問題解決力は3.71ポイント伸びたため、留学後に他のグループとの差は縮まっていた。短期留学経験者のグループは、留学前のコミュニケーション力の値が3つのグループの中で一番高かったが、留学前後での差分は他の2グループよりも小さかった。短期留学経験者の留学で求められる行動の値のみ、留学前後で比較して留学後に減少していた。

4 まとめと今後の課題

本稿では、一橋大学から2016年度と2017年度に1~2学期間の派遣留学に参加した学生に対して実施したJAOS留学アセスメントテストの結果に基づく分析を報告した。全体データでは、4つのグローバル力のうち、コミュニケーション力について、留学前後の変化に統計的に意味のある有意差が確認された。前述の通り、今回分析対象とした学生に対しては、留学前のオリエンテーションにおいて、特にコミュニケーション力に着目して、留学中にどのコンピテンシーを伸ばしたいかという目標を設定してもらっていた。このことが、留学後のコミュニケーション力の値の増加に影響を与えた可能性がある。今後は、留学前に行った介入の影響と、コミュニケーション力の

値の向上の関連性について、さらに詳しく検証を行っていく必要がある。加えて、この他の3つのグローバル力についても、留学前に目標を設定することで、留学前後での伸びが大きくなりうるのかについての調査を行うことも有益であろう。そして、本稿の分析では欠けていた、留学を行わない学生を対照群として調査を行うことが、留学の純粋な効果を検証する上で今後不可欠である。

また、本稿では、過去の海外経験別による分析も行った。一般的には、大学生全体のうち海外留学経験のある学生は3%程度に過ぎないと指摘されている(「トビタテ! 留学 JAPAN」PR 事務局, 2018)。しかし、今回の分析対象者である1~2学期間の派遣留学参加者の約半数が過去に1ヶ月以上の海外経験を持っていた。具体的には、分析対象者の約32%が1~2ヶ月間の短期留学参加者であり、約15%が1年以上の親の仕事に伴う海外在住経験者だった。そのため、本稿での分析からは、過去に1ヶ月以上の海外経験がある学生が、1~2学期間の派遣留学に参加する割合が、大学生全体における留学経験者の一般的な割合と比較すると高かったと言える。

また、本稿では、過去の海外経験別による、4つのグローバル力の違いについても分析を行った。本稿の分析結果では、過去に1ヶ月以上の海外経験が無い学生のグループは、留学前後ともほぼ全てのグローバル力の値が一番高かった。特に、過去に1ヶ月以上の海外経験の無い学生が、過去に何らかの海外経験のある学生よりも、留学前に既に3つのグローバル力が高く、その一方で、過去に長期間にわたって親の仕事に伴う海外在住経験をした学生の留学前のグローバル力の値が他のグループよりも低い傾向にあったことは注目に値する。これは、グローバル人材としてのポテンシャルが高いと想定されがちな大学入学以前に長期での海外経験のある帰国子女のイメージに反する結果であると言える。渡部・阿部・星・二子石(2017)でも指摘されているが、大学入学以前の長期での海外留学経験は、本調査で対象としているグローバル力の向上には直接結びつかないという可能性や、大学入学以前に長期で海外留学のある場合に、日本帰国後の再適応プロセスにおいて、日本の社会的規範に合わせるためにグローバル力を発揮しないよう努めているという可能性などの仮説の検討も含め、本結果の背景について、今後さらなる検証が必要である。ただし、過去に親の仕事に伴う海外経験のある学生のグローバル力の留学前後での値の変化は、他のグループと比較して大きかったことから、このような学生が派遣留学に参加することの意義も同時に示唆されている。過去の海外経験が長い学生に対しては、派遣留学前の渡航前オリエンテーションにおいて、異なる介入を行うことも含めて、様々な学生に対して、留学経験を通じて自らを成長させる機会としてもらえるよう、今後も工夫していくことが求められている。

さらに、過去に1~2ヶ月程度の短期留学に参加した経験のある者は、過去に1ヶ月以上の海外経験のない学生や、過去に海外在住経験のあった学生と比較して、派遣留

学を通じた変化が限られている傾向にあった。前述の通り、過去にまとまった海外経験のあるものは、2 回目以降の海外経験の効果は限られる傾向にあるという報告があるが (McKeown, 2009)、今回の分析結果では、1 ヶ月程度の短期留学経験者に対して、特にこのような傾向が見られたと言える。日本の大学においては、1 ヶ月程度の短期留学への参加をステップとして、より長期の派遣留学に参加してもらおうということが期待されているが、大学在籍中に複数回留学を行う場合の、留学を通じた学びの効果を高めるための介入方法を探ることも、今後の課題であると言える。

参考文献

- 阿部仁・新見有紀子・星洋 (2018) 「グローバル環境で育む 4 つの力：留学前段階における派遣学生の行動特性測定結果」 『一橋大学国際教育センター紀要』 第 9 号, 5-18 頁
- 海外留学協議会 (JAOS) ・行動特性研究所 (n.d.) 『JAOS 留学アセスメントテスト』
<http://iobt.jp/wp-content/uploads/2015/03/%E3%83%91%E3%83%B3%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%88%E3%80%8CJAOS%E7%95%99%E5%AD%A6%E3%82%A2%E3%82%BB%E3%82%B9%E3%83%A1%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%86%E3%82%B9%E3%83%88%E3%80%8D.pdf>
- 学校法人河合塾 (2018) 『「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」 成果報告書』
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2018/11/22/1411310_1.pdf (2019 年 5 月 6 日閲覧)
- グローバル人材育成委員会 (2010) 『産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会報告書：産学官でグローバル人材の育成を』
- グローバル人材育成推進会議 (2012) 『グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)』
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2019 年 5 月 6 日閲覧)
- 経済産業省・中小企業庁 (2018) 『「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」 (人材力研究会) 報告書』
https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf (2019 年 5 月 6 日閲覧)
- 総務省 (2017) 「グローバル人材育成の推進に関する政策評価<結果に基づく勧告>」
http://www.soumu.go.jp/main_content/000496484.pdf (2019 年 5 月 9 日閲覧)

- 「トビタテ！留学 JAPAN」PR 事務局 (2018) 『企業採用担当の 63.6%が留学経験者を積極採用意向の一方、留学経験がある大学生はたった 3%』
https://www.tobitate.mext.go.jp/newscms/img/news/50_1_4awxv2WhCwhi6s6G.pdf
(2019 年 5 月 6 日閲覧)
- 日本学生支援機構 (2019) 『平成協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果』
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2018/_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30n_1.pdf (2019 年 5 月 6 日閲覧)
- 野口剛 (2009) 「京都大学生における留学志向の三層構造とその規定要因」『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起：第 3 回アンケート・インタビュー調査報告書』91-104 頁
- 船津秀樹・堀田泰司 (2004) 「海外留学に関する意思決定問題」『商学討究』第 55 巻, 第 1 号, 89-108 頁
- 山本桃子・遠藤健・沈雨香 (2017) 「誰が海外を志向するのか：早稲田大学教育学部生への学生調査から」第 31 巻, 第 1 号, 117-133 頁
- 渡部由紀・阿部仁・星洋・二子石優 (2017) 「グローバル環境で育む 4 つの力：留学前段階における派遣学生の行動特性測定結果」『一橋大学国際教育センター紀要』第 8 号, 143-156 頁
- Koizumi, R., & Katagiri, K. (2007). *Changes in speaking performance of Japanese high school students: The case of an English course at a SELHi*. ARELE, 18, pp.81-90.
- McKeown, J. S. (2009). *The First Time Effect: The Impact of Study Abroad on College Student Intellectual Development*. SUNY Press.

(しんみ ゆきこ 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 講師
あべ じん 一橋大学 国際教育センター 准教授
ほし ひろし 社団法人行動特性研究所 代表理事)